



浜松ホトニクス株式会社

2026 年 9 月期第 1 四半期決算説明会

登壇

児玉：本日はお忙しい中、浜松ホトニクス株式会社、2026年9月期第1四半期決算説明会にご参加いただき、誠にありがとうございます。

出席者の紹介をいたします。執行役員、小笠原律志、進行は私、コーポレートコミュニケーション部、児玉が担当させていただきます。

本日は、2026年9月期第1四半期について説明いたします。説明終了後、質疑応答に移らせていただきます。資料は、弊社ホームページに掲載されておりますのでご確認ください。終了時刻は12時を予定しておりますが、進行状況により延長となる場合がございます。ご了承ください。

それでは小笠原執行役員、お願いいたします。

ポイント

■ FY26 Q1 実績

売上高 519億円 (前期比 +2.6%)

- 産業用の好調継続、医用バイオの需要は底打ち

営業利益 24億円 (前期比 -43.9%)

- 成長に向けた投資により、売上総利益率 2.7 pt低下および販管費11億円増加

■ FY26 Q2以降の見通し

- 堅調な受注を踏まえ、業績見通しに変更なし
- 価格最適化に向けた交渉実施、下期にかけて売上総利益率改善へ

■ 自己株式の取得状況 (2026年1月31日までの実施状況)

- 取得した株式の総数：5,959,900株
- 株式の取得価額の総額：9,795,646,900円

2025年11月7日リリース
取得期間：2025年11月10日～2026年9月30日
買付予定額：200億円 (上限)
買付予定株数：1,500万株 (上限)

小笠原：それでは、資料に沿ってご説明申し上げます。説明時間は10分程度を予定しております。どうぞよろしくお願いいたします。では始めます。

こちらが、今回の第1四半期決算のポイントです。3点に整理しております。

一つ目、業績の概況です。

第1四半期の売上高は519億円となり、前年同期比で2.6%の増収となりました。背景としては、半導体を中心とした産業用分野が引き続き堅調であることに加え、前期まで弱含んでいた医用・バイオ分野が底を打ち、反転の兆しが見え始めています。当社の主要な二つの分野がともに好調に推移しております。

一方、営業利益は24億円となり、前年同期比マイナス43.9%の減益となりました。要因は、売上総利益率の2.7ポイント低下と、人件費の増加によるものです。いずれも将来成

長に向けた投資に伴うものであり、ここ数年の大型投資については、収益貢献まで一定の時間を要する見込みです。現在は、その準備期間と位置づけています。

二つ目、通期業績予想についてです。結論としましては、昨年11月に公表した通期予想から変更はございません。

第1四半期の営業利益進捗率は13.9%と低い水準ではありますが、受注環境は底堅く、確実に潮目が変わりつつあります。加えて、昨年より取り組んでいる価格の適正化の交渉が下期より順次反映される見込みで、売上の回復と併せて利益率の改善を見込んでいます。なお、受注状況については、今回新たな切り口で分析した資料を添付しておりますので、後ほどご説明いたします。

三つ目です。自社株買いの進捗です。昨年11月7日に公表いたしました、総額200億円、1,500万株の自己株取得につきましては計画どおり進捗しています。

なお、本中計において、ROEの改善が重要なテーマであると認識していますが、ここ数年行った大型投資は収益貢献まで一定の時間を要するものと考えております。一方で、その間も安定したキャッシュ創出力は確保できる水準にあると見ています。

そのため、中長期的な成長を最優先としつつも、資本効率の向上、株主還元のあり方につきましては、成長投資とのバランスを踏まえて継続的に検討していきたいと考えております。

業績概要

産業用の好調継続、医用・バイオの需要底打ち 先行投資による費用増加

(単位：億円)

	FY25 Q1	FY26 Q1	対前期	
			増減額	%
売上高	505	519	13	2.6
売上総利益	244 (48.3%)	236 (45.6%)	-7	-3.1
営業利益	42 (8.5%)	24 (4.6%)	-18	-43.9
EBITDA	94	75	-18	-19.6
当期純利益	41	27	-14	-33.5

業績の概要です。続きまして、第1四半期の業績の詳細をご説明します。

売上高は519億円、前年同期比プラス13億円、プラス2.6%、売上総利益は236億円、マイナス7億円、マイナス3.1%、営業利益は24億円、マイナス18億円、マイナス43.9%、当期純利益は27億円、マイナス14億、マイナス33.5%でした。

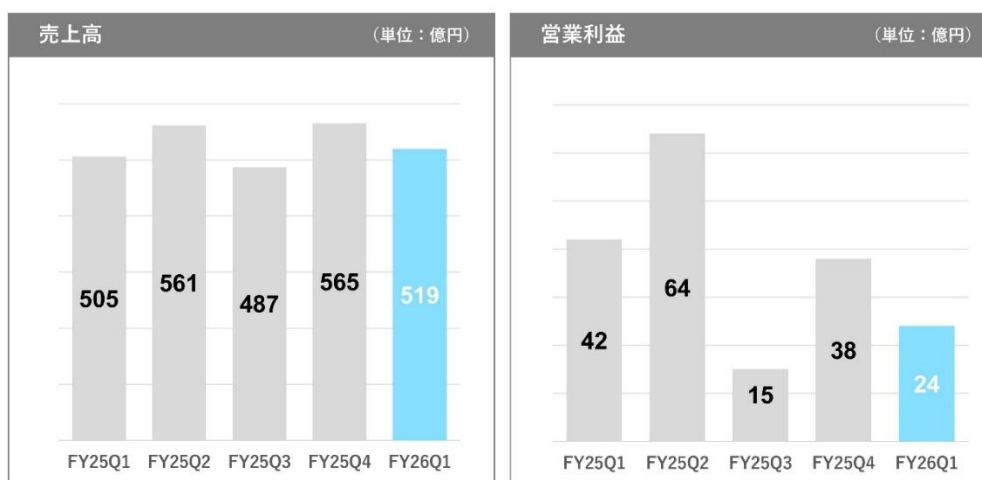
繰返しになりますが、半導体を中心とした産業用分野が堅調に推移していることに加え、

医用・バイオ分野につきましても、足元では底を打ち、回復の兆しが見え始めております。一方で、原価の上昇および販管費の増加が利益を圧迫しました。

特に、粗利率は前年同期比で 2.7 ポイント低下しており、減益要因として大きな影響を与えております。この粗利率の低下は、買収した NKT Photonics と Fairchild Imaging が主な要因となっております。

ここは、後ほどまた説明いたします。

四半期推移



こちらが四半期ごとの推移です。ここでお伝えしたいのは、売上高のトレンドです。足元の受注状況を踏まえますと、売上高は、第 1 四半期から第 2 四半期、第 3 四半期から第 4 四半期にかけて、増加する傾向になると考えています。

業界別売上高

(単位：億円)

	FY25 Q1	FY26 Q1	前期比	
			増減額	%
産業用	173	181	8	4.6
医用・バイオ	144	159	14	10.2
分析	64	61	-3	-4.9
学術研究	49	45	-4	-9.0
計測	24	30	5	23.7
輸送	12	10	-1	-13.3

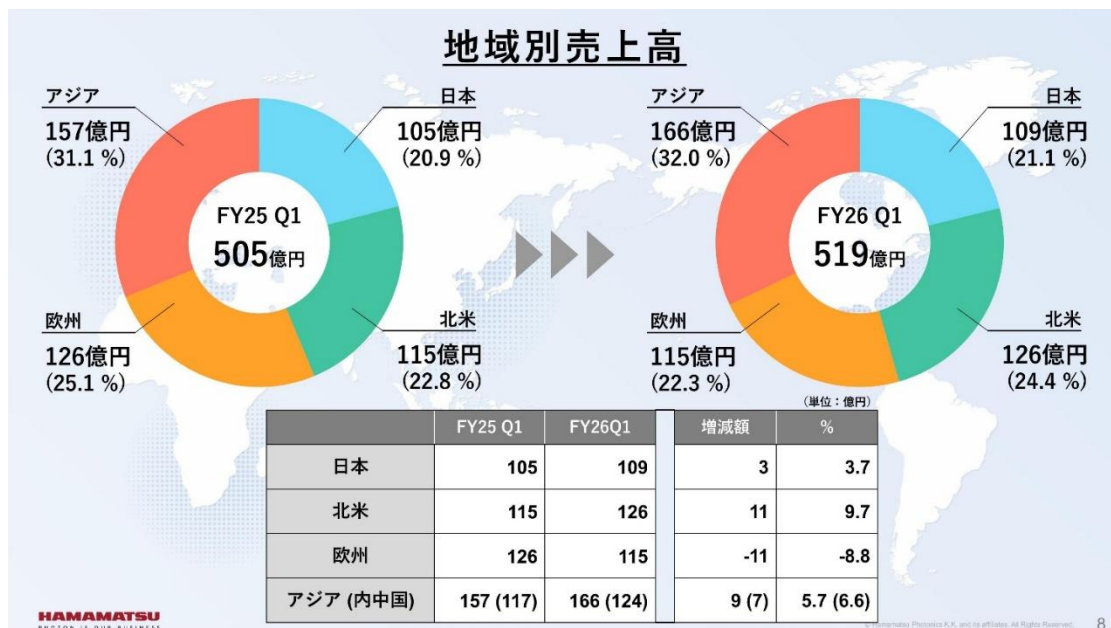
業界別の売上動向です。非破壊検査および半導体分野が引き続き好調で、産業分野全体としても順調に推移しています。

医用・バイオ分野につきましては、昨年まで続いた需要調整が一巡し、足元では底打ちと判断できる状況になっております。

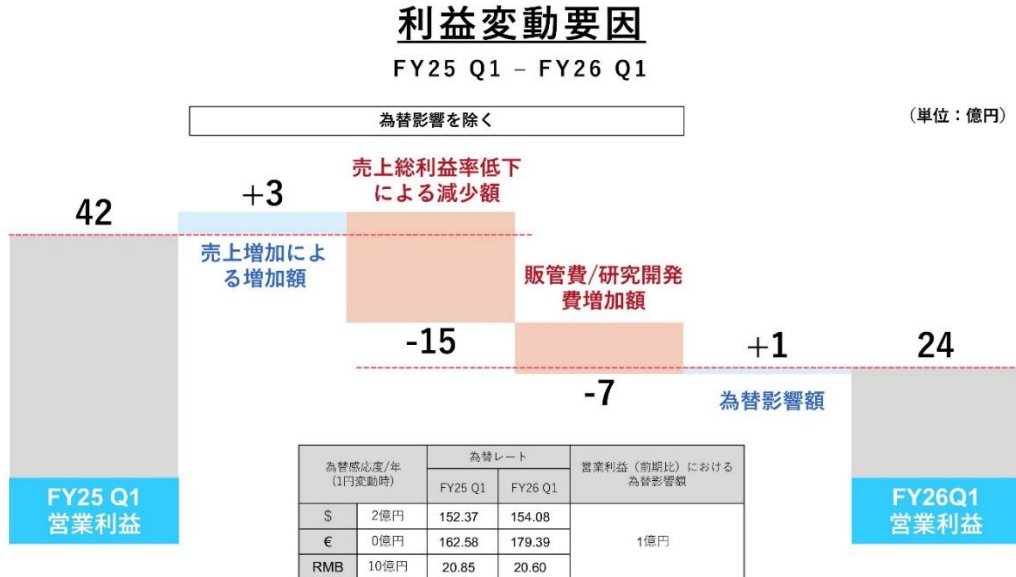
分析分野は、昨年の高水準の反動になり、第1四半期では減収となりました。ただし、これは一時的な成長ペースの正常化によるものであり、需要そのものが後退局面に入っているとは見ておりません。

学術分野は大型プロジェクトの終了を受けて前期比減収となっています。

地域別売上高



こちらが地域別売上高です。全体の構成に大きな変化はありません。一方、先ほど申し上げた大型案件の終了により欧州が減収となっています。



こちらが利益変動要因です。

要因について少し具体的に説明いたします。粗利率の低下による影響はマイナス 15 億円です。

このうちおよそ半分が、NKT Photonics と Fairchild Imaging によるものであります。Fairchild Imaging は、前年同期は連結対象ではなく、また当社全体の粗利率の平均と比べて低いことから、第 1 四半期の利益率に影響を与えました。

残りの影響については、人件費や材料費の上昇によるものが主な原因であります。これらの原価上昇については、昨年からお客様への価格転嫁に向けた交渉を進めております。この効果が本格的に現れるのは、下期以降になると見えています。

販管費については、通期で 40 億円の増加を見込む中、第 1 四半期では為替の影響を除いて 7 億円の増加となりました。今期は間接費の削減にも着手しており、今後の効率改善に向けた取組みを進めているところでございます。

棚卸資産の状況

CCC (キャッシュコンバージョンサイクル)短縮に向けた取り組み

- ・ 検取待ちの半導体故障解析装置の増加
- ・ 受注増加を背景にFY26Q2以降に向けて棚卸資産増加
- ・ CCC240日の目標に変更なし

[棚卸資産推移]

(単位：億円)



[CCC]

FY25 Q4	FY26 Q1	FY28 (目標)
290日	292日	240日

CCC240日を目安に棚卸資産回転日数の削減を進める

こちらは棚卸資産の状況です。棚卸資産は、前期末比で 27 億円増加しています。主な要因ですが、ここに記載しているとおりですけれども、検取待ちの半導体故障解析装置の増加に加え、第 2 四半期以降の出荷に向けた準備によるものであります。

半導体故障解析装置につきましては、単価が高く、また売上計上が 3 月、9 月に集中するという傾向があるため、第 1 四半期は在庫が一時的に増加しやすい傾向にあります。ただ、これは一時的な要因であり、FY28 に向けたキャッシュコンバージョンサイクル 240 日の目標に変更はありません。

業績予想

現時点において業績見通しに変更なし

(単位：億円)

	FY25	FY26 (計画)	前期比	
			増減額	%
売上高	2,120	2,220	99	4.7
売上総利益	1,013 (47.8%)	1,062 (47.8%)	48	4.8
営業利益	161 (7.6%)	172 (7.7%)	10	6.4
EBITDA	385	399	14	3.8
当期純利益	142	143	0	0.7

これが、通期の予想でございます。現時点では変更はありません。

第 2 四半期以降について、増収と利益率改善による両立を見込んでいます。その根拠につきましては、後ほど説明する受注の状況でご説明したいと思います。

FY26 Q2以降の見通し

業界		Q2以降の見通し
産業用	半導体製造・検査	AI半導体需要の拡大を背景に、半導体検査装置向け光源・センサが好調
	半導体故障解析装置	HBM向け故障解析装置が好調
	非破壊検査	データセンターおよびAIサーバー需要の拡大に伴い、サーバー向け基板の検査用X線源が好調
医用・バイオ	放射線検査	売上動向に大きな変化なく推移する見込み
	検体検査	バイオ分野の大幅な回復には時間を要する見通し

これが、業界別の今後の展望でございます。

半導体製造・検査分野については、AI 半導体需要の拡大を背景に、半導体検査装置向けの光源やセンサが引き続き好調に推移しています。

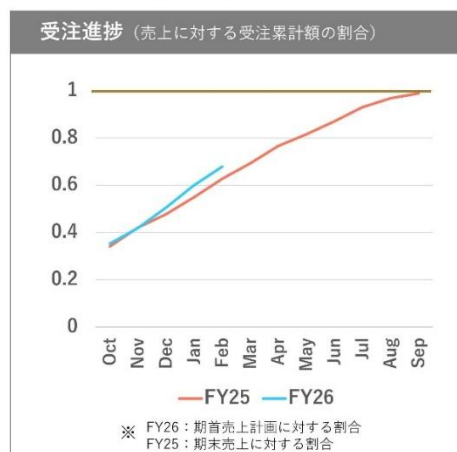
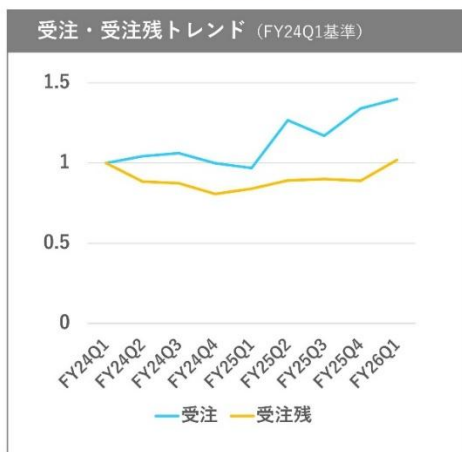
半導体故障解析装置につきましては、HBM 向けを中心に需要が堅調であります。足元でも好調な状態が続いております。

非破壊検査分野については、データセンターや AI サーバー需要の拡大に伴い、サーバー向け基板の検査用途で X 線源の需要が伸びております。

医用・バイオ分野については、放射線検査分野は、売上動向に大きな変化はなく、おおむね安定的に推移する見込みでございます。一方、検体検査分野につきましては、バイオ分野全体の回復に引き続き時間を要すると見ておりまして、慎重に状況を見極めております。

受注推移

受注額は引き続き好調を継続
FY26売上計画に対する受注進捗も昨年以上に順調に推移



HAMAMATSU
PHOTOS IS OUR BUSINESS

© Hamamatsu Photonics K.K. and its affiliates. All Rights Reserved. 14

これが受注状況でございます。

左側のグラフ、これは従来からお示ししているもので、FY24の第一四半期を1とした受注および受注残の推移を示しております。受注額は引き続き堅調に推移しており、特に半導体分野では好調な状況が続いております。

右側のグラフは今回新しく追加しました。従来の左のグラフだけですと、時間軸の概念が分かりにくいというご指摘もいただきましたので、今回新たに追加しました。

このグラフですけれども、当期の通期の売上計画に対して、どのように受注を獲得していくかというものを示したものです。FY25のオレンジの線が、昨年の売上高の着地に対してどう増えていったか。ブルーが、今期の計画に対して、どうやって積み上がっているかということを示したものです。

スタート時点では同じような推移を示しておりましたが、年末から今年に入って、受注が堅調に推移しているということを、これでご理解いただけたと思います。

これが、通期の見通しが達成できると当社が考えている根拠でございます。

以上、第1四半期の業績の概要と今後の見通しについてご説明いたしました。

第1四半期の実績は、やや出遅れ感がありますけれども、受注環境は底堅く、確実に潮目が変わっていると思っております。下期に向けては、着実な回復が期待できる状況だと考えております。通期の達成に向けて、引き続き全社一丸となって取り組んでまいりますので、よろしくお願いいたします。

私の説明は以上でございます。ありがとうございました。

質疑応答

Q1：第1四半期は想定の範囲内なのか？

A1：第1四半期については、いくつかの製品・子会社で売上の立ち上がりがやや遅れた部分があった。通期で見た場合には想定範囲内と認識している。特に子会社の案件で第2四半期以降に期ずれしたものが多く、受注がなくなったわけではないため、通期計画に対しては十分に挽回可能。

Q2：粗利率が弱く見えるが、計画比でどの程度未達なのか？

A2：第1四半期の粗利率は45.6%。直近で買収をした子会社2社を除くと47.3%となり、前期実績（48.7%）や計画（48.9%）からは若干のビハインドがある。これは主に売上時期の遅れと高採算製品の出荷タイミングが影響したもので、下期に予定している価格改定の効果と第2四半期以降の売上回復によって通期では十分に改善できると見込んでいる。

Q3：価格交渉の状況は？

A3：昨年から継続して交渉しており、製品別・顧客別に進捗に差はあるものの、着実に折衝が進んでいる。

Q4：人的資本の最適化はどの程度進んでいるのか？

A4：人員の適正化を進めており、年間で約3億円の削減効果を見込んでいる。また、ここ数年積極的に行ってきた採用については、来年度以降はコントロールし、3年レンジで適切な人員構成を維持する方針。同時に、間接費の削減も昨年から取り組んでおり、こちらも約3億円の削減を見込んでいる。

Q5：半導体故障解析装置やステルスダイシングなどの弱さが粗利を押し下げたのか？

A5：第1四半期は半導体故障解析装置やステルスダイシング関連の売上が一時的に弱く、これが粗利率を押し下げた要因となっている。ただし、これらは2Q以降に出荷・検収が進む見込みであり、通期では計画通りに売上・利益が構成される予定。

Q6：受注の伸びが続いているが、第2四半期・下期はどのような見通しか？

A6：受注環境は引き続き堅調で、特にAI・データセンター関連投資を背景とした電子部品検査向けマイクロフォーカスX線源が強い。また、半導体検査装置向けの需要も市場全体の成長に連動しており、第1四半期の高い受注水準は第2四半期以降も維持される見込み。ただし、四半期ごとに凸凹はありうる。

Q7：マイクロフォーカスX線源の売上はどうか？

A7：過去に大きく伸びた EV 電池検知向けは足元では横ばい。一方、電子部品検査向けは金額規模が大きく、現在は電池向けの 2 倍以上。今期は電子部品向けの伸びがさらに高まる見込みで、事業全体を大きく押し上げている。

Q8：値上げ前の駆け込み受注で、値上げ後の注文が弱くなることはないか？

A8：今回の値上げについては、顧客と適用開始のタイミングを明確に合意した上で進めているため、駆け込み需要が発生して値上げ効果が薄まるといった事態は想定していない。

Q9：NKT Photonics の課題は売上か、コストか？

A9：売上については第 1 四半期の遅れはタイミング要因であり、通期では計画値に戻ると判断している。コストに関しては、現地で必要な最適化が進んでおり、構造的な過剰コストを抱えている状況ではない。したがって、課題は構造ではなく、第 1 四半期の立ち上がり時期に偏りがあったという点に過ぎない。

Q10：医用・バイオの 2Q 以降の動向は？

A10：セグメント全体としては期初計画どおり。細分化すると、放射線検査は在庫調整が一巡し、受注も回復傾向。一方、検体検査は昨年度からの弱い環境が継続しており、回復には時間がかかる見込み。このため、医用・バイオ全体では放射線検査が回復をけん引する形を想定している。

Q11：通期売上総利益率 47%を達成するには、下期の売上総利益率は 49%が必要では？

A11：四半期ごとに階段状に改善していく見通しで、下期が一律 49%となる必要はない。値上げによる改善に加え、高採算製品の出荷が第 2 四半期～下期に向けて増加するため、通期で計画 47%の達成は可能。